

2004

10.23

新潟県中越大震災支援活動報告



新潟県民主医療機関連合会

中越大震災をふりかえって いつか笑顔あふれる故郷に

ながおか医療生活協同組合 理事長
羽賀 正人

あの日(10/23)から約3ヶ月がたち、地割れも、がけくずれも、倒壊した家も真っ白な雪に覆い尽くされました。いまだ余震がつづき、そのたびに屋根の雪を見上げては、多くの人が心細い毎日を送っています。今年は、小雪であってほしいという多くの人の願いはかなわず、例年の倍の積雪となってしまいました。被災者にとってはいつもにまして長い冬と感じられることでしょう。

私たちにとっては、無我夢中の3ヶ月でしたが、かつて経験したことのない困難を多くの方々のささえにより、乗り越えつつあります。

私達の診療所は、結果として倒壊ゾーンとよばれる激震地帯の淵にいました。そのために多くの貴重な経験をしました。

まず、第一に、あの日の初動はどうであったか?反省だらけです。電話が通じない、ライフラインをたたれることがこんなに大変なものか身をもって体験しました。発生がほぼ夜に近かったために混乱がさらに高まりました。しかし、多くの職員が自発的に参集してくれました。そのことで、当日夜からの診療活動や引き続き支援活動が可能となりました。第二として、診療所ならびに付属施設が、気が付いたら避難所となり、精一杯の受け入れを10日間おこなったことです。近隣の公的避難所の天井が相次いで崩落して、住民の多くが道端にさまよう状態でした。近所のスーパー駐車場には黒山の人だかり、店員から子供だけでもあずかってもらえないかと依頼され、毛布にくるまれ、不安でおびえている幼子達をみて、後先考えずに快諾しました。すると続々と、最高で100名前後の収容をいたしました。徐々に重傷者が増え、地域の基幹病院から状態の安定している要介護者が救急車で送られてくるという、震災時ならではの逆転現象が起きました。これらの方々

の食事提供、健康管理は診療所としては力量を超えるものでしたが、新潟勤医協や全国の民医連、医療生協の支援でなんとかやりぬきました。先日、県医薬国保課から震災時の医療活動に対して感謝状をいただくことができました。みんなでありがたく受け取りました。

第三に、復興にむけての取り組みです。住まいを失った被災者は、ほぼすべて仮設住宅にうつっておられます。行政の取り組みも阪神、淡路のそれとは格段に進歩していますが、いかんせん、個人補償の制度は未確立で、多くの人が今後の生活不安を抱えておられます。被害のひどかった地域では約2割の人口流出が認めれており、自主廃業、移転など生活基盤が失われているなかでいかにあらたな復興プランをつくっていくかが課題です。その中で私達のできることは何なのかを模索していきたいと思います。

最後に、全国の民医連、医療生協のみなさまの物心両面にわたるご支援に感謝申し上げます。こちらは何分、弱小法人でうけいれ体制が不十分であったことから、皆様の善意をいかしきれなくて申し訳ありませんでした。ただ、これが民医連なんだとばかりに、とにかくやればいい、いけばいい式の医療支援は、この「協働」の時代にはもうふさわしくないと思います。今回、地元医師会から事実上の「医療支援収拾勧告」を2回受けました。今後の教訓としていただきたいと思います。

これから長い復興のまちづくりがはじまります。あわてず、足元をみながら、地域の方々と「笑顔あふれるふるさと」めざして日々つとめてまいりたいと思います。

現地対策本部本部長のことは 2004 年は 本当に大変な年だった

現地対策本部 本部長
ながおか医療生協 専務
山田 栄作

それにしても、2004年は本当に大変な年だった。7月13日は集中豪雨で、生協かんだ診療所の周りを歩いて被災状況を把握しに向いたが、診療所から離れた中之島、三条、見附は堤防決壊なども起こり大変な被害を受けた。長岡では浦瀬や新組地域などで被害が大きかった。デイサービスのお風呂を被災者の入浴に開放した。知的障害者作業所「大きなかぶ」のみんなと避難所の体育館めぐりをして、あったかおしほりの提供など救援活動にとりくんだ。その後、中之島に泥除けボランティアとして参加した。今思えば、もっと初動の迅速さが必要だったと反省している。

その後、台風は上陸するたびに「これまでにない大型の台風…」と形容され、日本列島は未曾有の被害となった。10月20・21日に吹き荒れた台風23号は、史上最大規模で来襲し、豊岡市は90%が冠水する大被害を被り、ろっぽう診療所は水没した。その2日後、23日午後5時56分、新潟県中越を震源とする震度7の大地震が起こった。そのとき私は、職場の同僚と並んで東京駅上越新幹線ホームを歩いていた。突然、左に整然と並んでいた新幹線「とき」の車両が大揺れに揺れた。右に左に激しく揺れ、横倒しになる感じだった。咄嗟に「やばい! 関東で地震が発生した。一刻も早く東京脱出だ!」と思った。ところが、構内放送では震源は新潟県中越地方だと伝えた。一斉に携帯電話が手の中で踊ったが誰のものも繋がらない。心配と不安が体中駆け巡るが、如何ともしがたい。なすすべがない。いろんなことが頭の中に浮かぶ。祈る(お任せ)しか手がない。

いつどこで災害が発生するかはわからない。また、発生した時に自分がどこにいるかもわからない。とりわけ、災害発生の実地でない場所にいるときは自らなすべき手立てがない。①まず、現地との連絡がとれない。

②また、そこに行く交通手段がない。離れた場所からは現地のことを思うことしかできない、状態だった。翌24日に長岡に帰ってから、羽賀先生、星野先生の地震発生時からの対応を聞いて、③災害現場は「自立」が基本だと考えさせられた。日ごろから「自立」の訓練が大事である。避難訓練はまったくしていなかった。火災避難訓練予定日の前に大災害に遭遇した。なお、普段は火災避難訓練として計画されるが、その際「災害」訓練としても必要な準備訓練を行うことは重要だ。そして、この災害防災訓練を重ねていくことが重要だ。

上野で眠れぬ夜を明かし、翌朝8時、長野新幹線で長野医療生協に向かう。長野中央病院の前では高藤専務が緊急車両の手配を整えていてくださった。緊急米、水、LPガスボンベとコンロ、石油ストーブ、毛布、りんごなどが自動車満杯に積み込まれた。隙間に同乗させてもらい出発した。LPガスボンベとコンロ・大型鍋(寸胴鍋)・水・食料は、身も心もあっためる一番の優れものであった。そこに、長野医療生協は最初から最後まで責任を持って、炊き出しを担ってくれた。それは本当に被災者・職員に元気を与える最大の力を発揮した。

上信高速道で上越をまわり、北陸道を新潟へ向かって走る。柿崎で全車両が高速道を降ろされる予告が出ている。柿崎インターチェンジの手前3キロで渋滞になった。渋滞の最後尾について「ああ、どれくらいかかるかな?」と思った矢先に後ろから救急車が走ってきた。「それ、救急車を追っかけろ」「いいんですか? そんなことして?」「大丈夫だ。阪神のときの事務長たちは窓から身を乗り出して「救援隊です。道を開けてください」と叫びながら混雑の道を開いて行ったという。我々もがんばって走ろう」と追っかけた。2~300メートル追っかけたばかりなのに、よけていたパトカーから「その



長野ナンバーの車。緊急車両でないから止まりなさい」と停止指示。仕方ないから止まった。白衣姿で助手席から飛び出て事情を話す。「長野中央病院です。救援物資を積んで医療支援です」。警察官が車の中を覗く。「先導しましょうか」ときた。「お願いします」と頭を下げた。サイレンを鳴らし「緊急車両が通ります。道を開けてください」とパトカーの声。後をついて渋滞を通り抜けることができた。柿崎で降ろされるかと思いきや、「長岡料金所まで通れることは通れます。気をつけていってください」と。そして誰も通っていない高速道路をひた走る。あちこち陥没している。亀裂もある。がけ崩れもある。しかし、応急の道路補修工事はすでに始まっていて、その横を長岡インターチェンジまで走り抜けた。料金所では高速料金が免除された。12時40分頃だった。

医療機関の身分証明は大いに役立つ。特に病院の旗、腕章、白衣、名刺は必須アイテムだ。全職員に腕章を配っておき、各自の自動車などに常備しておくといよい。また、現地に駆けつけるためには、「緊急車両の登録」をすばやく行うことが肝心だ。警察にすばやく届け出る。そのステッカーや旗をフロントや側面に張り出して、誰が見てもすぐにわかる配慮が必要だ。ちなみに「民医連や医療生協」よりも「〇〇病院とか△△診療所」の名称のほうが誰でもすぐにわかっていい。とにかく医療機関の名称は使える。

ながおか生協診療所には1時20分に到着できた。3時には、新潟民医連の五十嵐会長や全日本民医連の事務局次長も到着し、羽賀理事長、高橋事務長も一緒に、ながおか医療生協地震災害対策本部を立ち上げた。それからの医療生協や民医連の応援はすばらしい勢いだった。全日本民医連や医療部会という全国組織があるが、この全国の力は何物にも変えがたい。



物資ともども医師、看護師、事務など、あらゆる職種が我先にと駆けつけた。救援物資の配給、炊き出しもすぐに始まった。避難所や被災地域への医療巡回や安否確認の訪問が旺盛にとりくまれた。小さな医療生協の診療所に、一日で230人をこえる全国からの支援の仲間がやってきた。残された記録を数えるだけで実数750人・延べ1,700人をこえる仲間が駆け寄ってくれた。一旦は医療支援要請を出したが、すぐにこれを打ち切った。要請に応える仲間が大勢過ぎたし、私たちの手にはあまった。来てくれた医療技術者に「医療支援を中止し、組合員訪問や地域全戸訪問をおこなっていただきます」とお願いすることの心苦しさ。ライセンスを生かせない支援活動に対して批判の声も上がったが、何とか拝み倒してお願いした。不満は残ったろうし、また我こそはと決意していただいた方々に「もう来ないでほしい」との対応に、「ひどい現地だ」との感情をもたれた方も多いと思う。

しかし、今回はこれで仕方なかったと思っている。阪神のときとは違った様相もあり、その地域地域での災害支援のあり方も深く考えさせられた。そこで、現地対策本部には全国の事務局次長クラスの常駐役員配置が必要だった。それも短期の引継ぎ体制でなく、少なくとも一ヶ月とかの交代しない体制が必要だったと思う。対策本部事務局には複数の事務局員の配置も必要だ。もちろん、現地の状況を熟知している地元幹部の配置も必要だ。地域地図が頭の中に入っていることは支援活動にとって大変役に立つ。組織担当はもちろんのことだが、全職員が地域に出向く活動を日ごろから取り組んでいることなどはいざというときに力を発揮する。また、地域での生協組合員組織の世話役さんがたくさんいることは大変心強い。

これから雪国の冬が始まる。そうでなくても自殺全



国一位の新潟の、雪降りの中での被災者の心の変化がどのようなになるのか。少しでも明日に向かって歩き続けられるための支援はできないものか。みなさんの智恵と力を引き続いてお借りしたい。それにしても、全国の仲間の熱い熱い連帯と友情は何ものにもかえがたい。右往左往する現地指示にも、不満を飲み込んできちんと従っていただいた仲間のみなさん。本当にありがとうございました。来ていただいた方、来たいのにこれなくなってしまった方、義援金カンパをいただいた方、全国で様々なとりくみをしていただいたみなさん。「ありがとう。ありがとう」

医療生協や民医連から現地ながおか医療生協に対しての温かい義援金を集めていただいた。被災復旧義援金としてだけでは使いきれない多額の義援金となって集まった。新潟民医連は長岡在住の職員や被災自治体への義援金として贈ってくれた。

民医連や医療生協は水害などの自然災害での救援活動を契機として数多くの診療所や病院が生まれ、地域組織が生まれたことを聞いている。その経験に学んで、今回ながおかに寄せられた義援金の活用方法を考えてみたい。被災地域と住民のために新たな診療所や介護施設など、被災空白地での民医連・医療生協の施設建設はできないものだろうか。被災時の旺盛な訪問活動で本当に喜ばれた支援活動を思い起こし、これを体現する新しい施設とそこでの医療生協組織の拡大にチャレンジする新しい歩みを踏み出すことはどうだろう。

さて最後に、災害は「忘れた頃に」ではなく、「思いがけないときに突然襲ってくる」ものだということを実感した。ゆめゆめ自分は別だと思ふことなかれ、です。

(2005年2月19日)





見かけない。こういう時は地元で長いこと住んでいないと近い避難場所がどこなのか、どう逃げたらいいのかわからないから困る。そういえば7月の水害の時に近くの中学校が避難所になっていたことを思い出し、そちらに全員を移す。大勢の避難者がいる体育館の一画をあけてもらって敷物や毛布にくるまってもらう。ただ問題はトイレだ。自立しておらず洋式しか使えない人が少なくない。診療所にもポータブルトイレは常備していなかった。グループホーム職員や小方君にこの場合はまかせ、ポータブルトイレを求めにホームセンターや介護用品の店などを探す。当然どこへ行っても真っ暗だ。高齢者センターに借用できないか訪ねてみたが置いてない。手ぶらで避難所に帰ったら、特別のはからいでグループホームの人たちだけでひとつの教室を使わせてもらっていた。しかもすぐ隣にトイレがありこれならまあ何とかできる。日付も変わろうとする時刻。長い一日だった。すこし疲れた。避難所の体育館もいっぱいになってきた。これ以上することはないだろうかなと思いつつも、しかしとても長岡のアパートでは寝る気になれない。明日からきっと大変なことになるだろうから、いったん新潟市の自宅まで帰ることに決めた。ところが幹線道路が通行止めのため、夜の道を市内から抜け出すのが大変むずかしい。よほど土地勘のある人かカーナビがなければ無理であろう。これではもっとも危険な地域に被災者を閉じこめてしまうようなもの。道路の損傷が軽微であれば市外へ避難する車だけは通すか、おおまかな迂回路を示しておいてもらいたいものだ。だからみんな車に泊まることになるのだ。自分自身は最初から車では休めない、それなら一晩くらいは起きていた方がマシと思っていたから絶対に家に帰ろうとカーナビを頼りに走る。ところどころ陥没していたのに注意しながらなんとか抜け出す。仮眠をし翌朝



4時半におきて新潟市を出て見附を経て、わりとスムーズに長岡にはいる。朝日のきらめきがすばらしく何かやらなければとこみ上げてくるものがあるが、同時に不安も大きく街並みが近づくにつれ気持ちは沈んでいく。戦地へ向かう時とはひょっとしてこんな気持ちなのかもしれない。

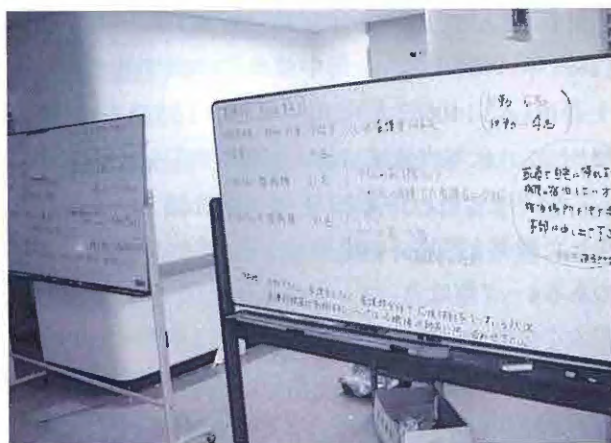
2日目のはじめの仕事は避難したグループホームの人たちの朝食確保。ガスは使えない。昨日からずっと一緒に避難所に泊まってくれていた職員の田中君と近くのコンビニにでかけ、それしか残ってなかったカップ麺を朝食だけこんなのでいいかな?と買いこみ電気ポットを診療所からもっていく。朝刊もしっかり届いていたので物流はよさそうだから昼食はまた何とかかなろう。一応救護所に挨拶をしておき避難所を出たところ、ちょうどパン屋のトラックが到着するのがバックミラーに映った。診療所の駐車場には車で一夜を明かしたデイサービスの職員らと数名の診療所職員が集まってきた。小方君、斉藤さん、星野君らと手分けして他の職員やデイ利用者への安否確認をしようとするが、緊急連絡網を書いた紙が所内から一枚しか発見できないしなかなか携帯電話が通じない。根気よくやってもらうことにして、自分は在宅管理している患者さん宅へ直接訪問にまわる。約20件ほどだったが人も家屋も大きな被害を受けたところはなく、それでも多くは留守で避難所にいた。介護度が高く容易に逃げられない老夫婦世帯などは半ば諦めて、ともに家の中にとどまっていた。介護度の高い人たちの多くはきちんと把握されていてその後市内ケアマネージャの働きで遠方のいろいろな施設に入所していったが、取り残されてしまう老人たちも少なくなかった。しかし介護保険がなかったらもっと大変だったろうと思う。そうしてひととおり地域を見てまわるが大きな損壊家屋はあまり見あたらない。道路も全



とをあらためて痛感しました。もはや日本国内においては一匹狼の医者だとか野戦病院など存在してはならないでしょう。また災害時だからこそ秩序がもっとも大切だということです。自分自身は今から考えても震災に対しては組織の一員としてしか動けなかったと思います。しかしそれで本当に医師として人として満足できたのか?はたして何のためにがんばったのか?次はどうしていくのか?そういう疑問がいつになっても出てくるように思います。

限られた中での救援活動でしたが、被災した方たちはただ純粋に自分を心配してくれる人や支えてくれる人たちが身近に来てくれたというだけで心から喜んでいました。ただ申し訳ないと思うのは、その感謝の思いを外来で私が聞かされることになってしまうことが多く、支援に来て頂いた皆さんに直接伝えることができないということです。この場を借りて心より感謝を申し上げます。力になっていただきどうもありがとうございました。完全なる地域の復興を遂げ安心のまちづくりを実現することこそ、その御恩に報いる唯一のことであると思っています。

(阪神淡路大震災から10年目の日に記す)



中越地震対策 NEWS

〇ながおか生協診療所に「現地対策本部」を設置！

現地ながおかでは、23 日夜より患者さんや近所の不安な方々が来院、羽賀・星野所長をはじめ、スタッフが対応しました。

24 日午後、五十嵐県連会長、山岸副会長、全日本大河原事務局次長、羽賀・星野両所長、山田専務、高橋事務長らで「現地対策本部」会議を開催、今後の診療や生活支援、支援体制など当面の活動内容を相談しました。

〇県連対策本部も確立！

五十嵐会長を本部長に大越県連事務局長、酢山次長、池田勤医協専務、大谷下越事務長、宮路舟江事務長、高橋勤医協看護部長、労組役員で構成。今後の支援体制などについて 24 日 10 時より検討を開始しています。

現地の様子

【かんだ診療所】

建物自体に大きな損傷はなし。ライフラインは 24 日午後 3 時頃やっと電気が通じました。電子カルテをはじめパソコンにはまったく問題ない様子。水は少し出る。ガスだけが両診療所とも使えません。

【ながおか生協診療所】

地域の方々やグループホームいずみ入居者など 30 名ほどが避難されていて、別に外来患者さんも来て診療しています。外科処置はできませんので、そういう患者さんには病院にいてもらうようにしています。診から 1 ㎞以内でも家屋が倒壊しています



※生協

25 日（月）の活動予定

1) 平常診療の対応

- ・ながおか生協診療所 羽賀所長
- ・生協かんだ診療所 星野所長

2) 在宅患者の対応

- ・訪問看護 ST すまいるおよびヘルパー ST おひさまは昨日に続き、訪問対応を第一とします。

3) 県連および県外支援ボランティアの活動

①市内避難所への医療相談行動

下越病院より太刀川 Dr、斉藤俊一 Dr、本間 Dr、今尾 Dr、原田 Dr、井沢 N s、X-P、事

お願い

現地状況はすべて県連に集中されますので、特に電話では個別にアクセスしないでください。支援内容についても県連（大越・酢山）にお問い合わせを！

務3名が到着、さっそく市内避難所を訪問して回っています。別に沼垂診療所よりも参加。近県からの支援の方々も加え、医師と看護師、他職員の3人1組で行います。

②地域まるごと訪問行動

住宅地図を片手に2人1組で地域を回ります。①以外の支援ボランティアの方をお願いします。

③水、食料等の支給係り

生協診療所に寄せられた支援物資を必要な市民の方々に支給します。

④食事係り

生協診療所等へ避難されている方々への朝、昼、夕食の調理対応をします。

県連・全国からの支援が続々と入っています！

地震災害で交通網が分断される中、次々と支援隊が長岡に来られました（24日までの分）。

【白根保健生協】

大関専務他1名。食料、ペットボトルを午前早くに。グチャグチャの生協診療所の壊れたガラス破片や棚を片付けていただきました。

【長野医療生協】

4名で水、病業ごはん400食、おにぎり、パン、りんごなどの食料、プロパンガスボンベ、石油ストーブ、灯油、ガーゼなどの医療品等。

【はるな医療生協】

中厚専務はじめ4氏

【群馬民医連】

長谷川事務局長はじめ4氏。11:00 高崎出発、18:00 によやく到着

【医療生協さいたま】

3氏、ミネラルウォーター、おにぎり、パン、おかゆ、豚汁、ホカロン等いただきました。



※長野からの支援者とともに夕食の準備

【全日本民医連】

大河原事務局次長 金沢での民医連会議から五十嵐会長とともに駆けつけられました。

【日生協医療部会】

長野医療生協に野本事務局次長が中心となって医療部会対策本部を設置。関東甲信越ブロックをはじめ医療生協の連帯の指示を発信しています。

【新潟民医連】

下越：五十嵐院長、岡島副院長、田辺副総師長、渡辺師長、大谷事務長（23日に水を届ける）、高井事務次長、中村さん

舟江：高井総師長、小網MSW

メディカル：山岸社長（23日から）、小野みのり薬局長、大原さん、小川さん、田辺さん、小林さん、新倉事務長

エヌエムケー：伊藤社長

県連事務局：酢山事務局次長、鈴木医学対専任、小網医師担当

※漏れている方がいらっしゃればご連絡ください。

※そのほか勤医協院所管理者も支援組織等を進めました。

10.23 新潟県中越地震 ながおか医療生協対策本部ニュース No. 1

2004/10/24 am 6:00

直後から救援活動に！

1. 10月23日の地震発生直後から羽賀理事長はながおか生協診療所に駆けつけ、在宅支援型住宅ゆーこーぼ鈴の入居者の安否確認、土田支援センター長、高橋事務長、南事務員も駆けつけゆーこーぼ鈴を自主的な避難受け入れとした。
2. 星野かんだ診療所所長はグループホームいずみに駆けつけ、入居者の安否を確認。
第2回目の大揺れの後、全員を北中学校に避難させる。小方支援センター長も駆けつけた。
かんだ診療所付近は停電、断水
3. 日が明けて24日（日）
羽賀理事長を先頭に自主的に診療応需

対策本部を設置！

10月24日（日）午後3時

ながおか医療生協対策本部を設置し第1回対策会議を行いました。

全日本民医連：大河原事務局次長、

新潟民医連：五十嵐会長、山岸副会長、酢山事務局次長、鈴木事務局員

ながおか医療生協：羽賀理事長、星野副理事長、山田専務、高橋事務長
など一同に会し検討いたしました。

対策本部長 山田 栄作 （専務）

対策副本部長 高橋 智憲 （事務長）

とし、25日（月）の予定等を話し合いました。

25日（月）の予定につきましては別紙を参照してください。

なお、ボランティアの方は以下の項目にご協力くださいますよう
よろしくお願いします。

- ・ ボランティア受付用紙、物資受付用紙の記入
- ・ 名札シールの記名、貼り付け
- ・ 腕章
- ・ 活動後の報告書記入

全国から救援隊が到着

地震災害では交通網の分断される中次々と支援隊が長岡に来られました。

白根保健生協

大関専務、笹川氏2名が来岡。食料、ペットボトルを午前に早く届けていただきました。

グチャグチャの生協診療所の壊れたガラス破片や棚を片付けていただきました。

長野医療生協

藤澤さん、新村さん、八井沢副総看護師長、出河医局事務さんの4人が、水、病業ごはん400食、おにぎり、パン、リンゴきゅうり、プロパンガスボンベ、石油ストーブ、灯油、ガーゼ医療品等。

第一隊は10:20に長野中央病院を出発、午後1:20には長岡到着。長野高速道で上越市へ出て北陸道を柿崎まで。柿崎では全車両が一般道へ下車させられますが、

「長野から支援物資をと医療品を持って来ました」とパトカーの先導を受け、そのまま長岡料金所まで快走しました。

第2隊は長野警察の緊急車両の証明を受け、自動車の前後に緊急医療支援車と大きく幕をはり、通行止めにて、高速道の通行許可を得て快走しました。

はるな医療生協

中厚専務をはじめ、樋口さん、池田さん、反町さんの4氏

群馬民医連

長谷川事務局長、菊池さん、宮原さん、林さんの4氏が11:00高崎を出発、6:00にようやく到着しました。水、おにぎり、等々いただきました。

医療生協さいたま

堤さん、坂巻さん、石崎さんの3氏

ミネラルウォーター、おにぎり、パン、おかゆ、豚汁、ホカロン等いただきました。

全日本全日本民医連

大河原事務局長

金沢での民医連会議から、新潟民医連会長の五十嵐修下越病院委員長とともにかけつけられました。

日生協医療部会

長野医療生協に野本事務局次長が中心となって医療部会対策本部を設置。関甲越ブロックをはじめ、医療生協の連帯の指示を発信しています

県内民医連

五十嵐会長、

下越病院から岡島副院長、田辺師長、渡辺師長、中村さん、高井さん、船江病院の高井師長、小網さん、

メディカルプランの山岸社長、小野さん、大原さん、小川さん、田辺さん、小林さん、

NMKの伊藤社長、

県連の酢山次長、鈴木さん

(記録漏らした人ごめんなさい。山田)